

ジャウイ文書研究会ニューズレター

第 1 号 2002 年 4 月 20 日

発行者：ジャウイ文書研究会事務局

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町 7-1

電話 03-3238-3697 Fax 03-3238-3690

上智大学アジア文化研究所 川島緑研究室

e-mail: midori-k@sophia.ac.jp

目 次

I. 研究会予定	p. 1
II. ジャウイ文書研究会について	p. 1
III. 研究会記録	
準備打ち合わせ会 (2001. 1. 27)	p. 4
第 1 回研究会 (2001. 4. 21)	p. 4
第 2 回研究会 (2001. 5. 19)	p. 6
第 3 回研究会 (2001. 6. 16)	p. 9
番外編研究会 (2001. 7. 20)	p. 12
第 4 回研究会 (2001. 10. 20)	p. 13
第 5 回研究会 (2001. 11. 24)	p. 14
第 6 回研究会 (2001. 12. 23)	p. 16
第 7 回研究会 (2002. 1. 20)	p. 17
第 8 回研究会 (2002. 2. 23)	p. 19

I. 研究会予定

4 月 20 日 (土) 上智大学

5 月 18 日 (土) 上智大学

6 月 22 日 (土) 上智大学

詳細は追ってご連絡いたします。これまで本研究会のご連絡を受け取っていない方で、今後、案内を希望される方は事務局にその旨、ご一報ください。

II. ジャウイ文書研究会について

2001 年 4 月 21 日、ジャウイ文書の研究へのより積極的利用に関心を持つ研究者が上智大学に集まり、第 1 回ジャウイ文書研究会が開催された。その後、現在までの 1 年間に、ほぼ 1 ヶ月に 1 回のペースで、研究会 (8 回) と番外編勉強会 (1 回) を開催した。毎回、15 名前後が参加し、その中には大学院生など若手研究者が多く含まれて

いた。東南アジア、中東、歴史学、イスラーム思想、政治学、教育学、文化人類学など、さまざまな地域や分野を専門とする研究者の参加を得て、毎回、長時間にわたって熱心に議論が行われ。ジャウィ文書研究に関する関心の高さが感じられた。以下は本研究会の概要である。

<趣旨>

東南アジアの文字としては、通常、インド系文字とローマ字が重要視されるが、アラビア文字も重要な筆記コミュニケーションの媒体として機能してきた。ムラユ語(マレー語)、インドネシア語、ジャワ語、アチェ語、ブギス語、サマル語、タウスグ語、マギンダナオ語、マラナオ語、チャム語など、東南アジアのオーストロネシア語系現地語は、それぞれ、アラビア文字に若干の改良を加えた表記方法を有している。これらのアラビア文字で記された東南アジア現地語文書としては、碑文、王統譜、歴史叙述、物語、法律書、イスラーム関連文献、外交文書、請願・ビラなどの政治文書、新聞・雑誌、商取引の文書、日常的な書簡やメモ、落書きなど、さまざまな種類がある。東南アジアの歴史や文化、思想、社会を内側から理解するためには、アラビア文字で記されたこれらの資料を、他の資料と併用することが不可欠である。

だが、これらのうち、ローマ字などに翻字されたり、国家言語や欧米諸語に翻訳されているものはごく一部である。また、東南アジアや欧米の文書館や個人が所蔵する膨大な数の現地語アラビア文字文書の大半は、研究に十分利用されていない。

現地語アラビア文字表記資料の研究への利用がこのように遅れている第一の原因は、研究上の関心の不足である。植民地期、および、国民国家形成期の欧米や東南アジアのアカデミズムは、西洋近代への志向性を強く持ち、アラビア文字表記資料やそれが伝える思想や精神世界を後進的なものとみなし、本格的な学問研究の対象としてこなかった。第二の原因は、研究基盤が整備されていない点である。辞書、文献目録などの工具類や参考文献が不十分な上、現地語アラビア文字表記方法の習得方法も確立していないので、研究者は多大な時間をかけて、個別に手探りで研究を行わざるを得なかった。そのため、現地語アラビア文字表記資料を読みこなせる人材が圧倒的に不足しており、東南アジアや欧米、日本の研究者間の協力体制も確立していない。

このような状況を踏まえ、本研究会は、専門分野や研究対象地域、習得言語を異にする研究者が、それぞれの専門知識を提供しあい、東南アジア現地語アラビア文字表記方法を一緒に学び、現地語アラビア文字資料を使いこなす能力を身につけ、研究基盤を整理し、その利用方法を検討し、実際の研究に役立てることを第一の目的とする。

第二の目的は、東南アジア各地のアラビア文字現地語資料の種類、書き手、形態、表記法、使用されている用語や概念、内容を比較検討し、それらの地域的差異や時期的変化を明らかにすることである。それにより、オーストロネシア語系言語とアラビア文字表記体系を共有する筆記コミュニケーション・ネットワークという概念を設定することに果たして意味があるか、また、あるとすればどのような意味があるかを検証することができよう。ここで想定しているネットワークは、南アジアやペルシア、アラブ世界ともつながりを持っており、もし、このようなネットワークを実証することができれば、それは、近代国家の国境や、東南アジア、中東といった既成の地域概

念を相対化する意味を持つであろう。

<「ジャウイ」の定義>

ジャウイということばは、一般的な用法としては、ムラユ語のアラビア文字表記という意味で用いられることが多い。ところで、前述のとおり、本研究会ではムラユ語以外の他のオーストロネシア語系現地語をアラビア文字文書も対象としており、これらを指し示す総称が必要とされる。そこで、本研究会では、「ジャウイ」の概念を一般的な用法より広くとらえ、それをムラユ語以外にも適用し、「**東南アジアのオーストロネシア語系諸言語のアラビア文字表記**」という意味で「ジャウイ」ということばを用いることにする。このような広義の「ジャウイ」は、フィリピン史研究者のサムエル・タン(フィリピン大学)など、一部の東南アジアの研究者にも用いられているものである。ただ、現実には、他の多くの研究者が、ジャウイを「ムラユ語のアラビア文字表記」という意味で用いている。そこで、必要に応じて、本研究会での用法を「**広義のジャウイ**」、一般に流通している「ムラユ語のアラビア文字表記」という意味でのジャウイを「**狭義のジャウイ**」と呼んで両者を区別する。

<活動>

研究会で行った主な活動は以下のとおりである。

1. 辞書、教科書、文献目録などの研究工具類についての情報交換
2. ジャウイ表記の習得を目的とした勉強会（マレーシアやインドネシアで発行された現代マレー語、現代インドネシア語のテキスト使用）。
3. ジャウイ資料の講読。
4. ジャウイ資料やその所在に関する報告。
5. ジャウイ資料を使った研究報告。
6. ジャウイ表記の地域的差異、時代的变化に関する報告。
7. 辞書、参考文献の共同購入
8. 南部フィリピンのジャウイ文書研究者、サムエル・タン氏招聘

各報告の概要は、本ニューズレター「III. 研究会記録」に収録している。

なお、本年度の研究活動は、文部省科学研究費創生的基礎研究「現代イスラーム世界の動態的研究」（イスラーム地域研究）（実施期間：1997-2001 年度、代表：佐藤次高）第2班「イスラームの社会と経済」（研究拠点：上智大学、代表：私市正年）の活動の一部「東南アジア・イスラーム地域における民衆と民衆運動 ―ジャウイ文書の重要性について―」として実施された。2001年11月からは、2001年度トヨタ財団トヨタ財団研究助成「東南アジア海域世界のジャウイ・ネットワークに関する基礎的研究」が開始された。2001年10月の研究会は、上智大学アジア文化研究所の研究活動として実施された。これら関係者の方々に心より感謝します。

III. 研究会記録

この記録は、「現代イスラーム世界の動態的研究」プロジェクト事務局の許可を得て、同プロジェクト 2001 年度報告書より転載したことをおことわりする。ただし、準備打ち合わせ会、第 8 回研究会記録の一部、および、出席者数・字句の訂正など、一部、変更した部分がある。文末〈 〉内は執筆者名を示す。

準備打ち合わせ会

2001 年 1 月 27 日 (土) 11:00-14:00

上智大学四ツ谷キャンパス 10 号館 322 号室 出席者：13 名

朝から大雪の悪天候であったが、若手研究者を中心とした 13 人が集まり、打ち合わせ会が行われた。参加者がもちよった工具類（辞書、書誌、教科書、ジャウィ資料など）を回覧しながら、ブレーストーミングを行い、研究会の企画を練った。その結果、ジャウィ文書に関する研究状況、資料所在、資料の利用方法に関する情報交換や報告、ジャウィ文書の講読、ジャウィ文書を利用した研究の報告を、適宜とりいれ、毎月 1 回、研究会を行うこととなった。まず最初に、黒田景子氏が提供した現代マレーシア語の教材と、服部美奈氏が提供したインドネシア(西スマトラ)の教材を用いて、ジャウィ表記の基本を勉強することとし、第 1 回研究会を 4 月に開催することになった。中堅・若手研究者が中心となって研究会を企画・運営すること、若手研究者を育てることに重点をおくことを基本方針とすることにした。〈川島緑〉

第 1 回研究会

2001 年 4 月 21 日 (土) 13:00-18:00

上智大学四ツ谷キャンパス 10 号館 322 号室 出席者：18 名

1. 趣旨・基本方針の説明 川島緑

アラビア文字で表記された東南アジア現地語文書（ジャウィ文書）は、この地域の歴史、社会、政治の研究にとって重要であり、特にイスラーム思想の研究にとっては不可欠の資料である。それにもかかわらず、ジャウィ文書の研究への利用は進んでいない。辞書、文献目録、教材などの工具類についての情報が不足しており、研究者は個別に手探りで研究を行なわざるを得なかった。そこで、専門分野や対象地域を異にする研究者が協力して、工具類や教材、研究状況についての情報を収集・共有し、勉強会を開催してジャウィ表記を習得し、研究動向や資料所在状況、利用方法を検討し、実際にジャウィ文書の講読を行ないたい。夏休み前の 3 回の研究会でジャウィ表記の基礎を習得し、夏休み後は、ジャウィ文書の講読を行ないたい。

2. Jawi を読み書きするためのマレー語の基本

黒田景子

ジャウィの基本としてつかう文字の説明があった。マレーシアではコンピュータ

一・ワープロソフト上のジャウィ文字の国際統一化の試みが行われており、そこでは、アラビア文字とそれを修正した 8 文字がジャウィ文字として用いられている。次に、ジャウィを読み書きする上で最低限必要なマレー語の基本知識の説明が行われた。特に注意すべきは、以下の点である。

- ・マレー語のローマ字つづり (ルミ) には、母音字が二つ続いているとき、二重母音の場合と、間に声門閉鎖音 (glottal stop) が入る場合の二通りがあるので注意する必要がある。しかし、ジャウィで表記すると両者はつづりが違うので、違いが明白になる。

- ・ルミでは曖昧母音 (はっきりしたエと、曖昧なエ) が両方とも同じ文字 (e) で表記されるが、ジャウィでは区別される。

- ・マレー語では、語根に接頭辞、接中辞、接尾辞がついて様々な意味がつけられる。これらの接頭辞や接尾辞をジャウィでどのように表記するかについては、配布資料 (Pedoman Ejaan Jawi Yang Disempurnakan) を参照のこと。

ジャウィ文書の例として、Salasilah atau Tarekh Kerajaan Kedah (ケダの歴史) の表紙が配られた。この本は、ジャウィとルミが併記してあるので、両者を対照して、ジャウィがどのようにルミ表記されるかをみることができる。

3. ジャウィ入門 (インドネシアの教科書を使って)

服部美奈

西スマトラの小学校で現在使われているジャウィ入門教科書 (小学校 3 年用) を用いて、ジャウィの読み方について説明があった。この教科書にはインドネシア語のやさしい単語や句のジャウィ表記されたものが掲載されており、各セクションの最初の課では、それぞれの単語のジャウィ表記とローマ字表記が併記されており、次のいくつかの課は、ジャウィ表記のみで学習者が自分でその読み方を考えるという構成になっている。教科書の冒頭で示されている原則にあてはまらないいくつかの例があり、それらをめぐって議論が行われた。また、ジャウィでつづられたことばが二通り以上の読み方ができ、それぞれ異なる意味がある場合もあるので、それらについては、文脈によって読み方、意味を推測する必要がある。

4. ジャウィ文献紹介(1) ジャウィ文献の概要

西尾寛治

ジャウィについての説明 (定義、使用する文字、語源、起源)、ジャウィ文献の概要の説明 (種類、呼称)、また特にキターブ・ジャウィと呼ばれる文献についての紹介がなされた。

東南アジア島嶼部のイスラーム化以前、ムラユ語はインド系の文字で表記されていた (例、チャンパの碑文、8 世紀のジャワの碑文、フィリピンのラグーナ銅板文書など) が、13 世紀末のイスラーム化降、アラビア文字表記が用いられるようになった。初期のジャウィ文献としては、トレンガヌ碑文 (1303AD)、ヌグリ・スンビランのシェイフ・アフマッド・マジュヌンの墓碑 (1467-1468) などが挙げられる。近世にはムラユ語が東南アジア島嶼部の共通語となったが、それと対応してこの地域の外交文書、物語 (hikayat)、歴史叙述 (sejarah) 王統譜 (silsilah, tarsilah)、イスラーム関係文献の翻訳書 (kitab Jawi) がジャウィで記されるようになった。例えば、テルナテ

のスルタンがポルトガル王に送った書簡(1521、1522)もジャウィで記されていた。

その他、ジャウィは植民地期の村落レベルの行政文書などの作成にも使用された。ジャウィと同種の表記法として、ジャワ語を表記するペゴン、ブギス語を表記するスランがある。なお、ルミ(ムラユ語のローマ字表記法)も17世紀初期までにヨーロッパ人によって確立され、キリスト教の布教に使用されていた。

質疑応答では、以下の議論が行われた。ジャワという概念とムラユという概念はどのように違うのか(見市)。『パサイ王統記』(Hikayat Raja Raja Pasai)や『ハン・トウア物語』(Hikayat Hang Tuah)では、ジャワ(=ヒンドゥーの大国マジャパイト)との対比を通して、ミナンカバウあるいはムラユという概念が強調されている。一般にジャワはムラユに入らないとみられていた(西尾)。ジャワとは、本来サンスクリット系のことばである。7-10世紀のイスラームの地理書では、東南アジア島嶼部をさしてZawash(ザワジュ:「大麦の島」の意)ということばが用いられている(野村)。

ムラユ語以外のジャワ語、ブギス語、タウスグ語、チャム語などのアラビア文字表記はジャウィとは呼ばないのか(川島)。この点に関して議論が行われ、マレーシアでのジャウィの通常用法、歴史学者の用いるジャウィの概念、フィリピンのミンダナオ研究者が用いるジャウィの概念などは一致しないことが明らかになった。この研究会では、東南アジアのオーストロネシア語系現地語をアラビア文字で表記したものを、広義の「ジャウィ文書」としてとらえ、研究の対象としていくこととした。「ジャワ」や「ジャウィ」という概念は単一ではなく、地域や時代により異なるので、地域的差異、時代的变化に注意を払いながら、研究を行っていく必要が確認された。

<川島緑>

第2回研究会

日時: 2001年5月19日(土) 13:00-18:00

場所: 上智大学四ツ谷キャンパス7号館第2会議室 出席者: 21名

1. Jawi を読み書きするためのマレー語の基本(2) 黒田景子(鹿児島大学)

前回に引き続き、マレー語を学んだことがない人を主たる対象として、マレー語の接辞、特に語根に様々な接頭語をつけて造られる動詞について説明が行なわれた。たとえば、語根の前に me, mem, men, meng, meny, mence を付け加えると動詞を造ることができる。これらを総称して、meN-形と呼ぶ。例) 語根 mohon(懇願)の前に me をつけて、memohon とすると「懇願する」という動詞となる。語根の先頭の子音により、上記のうち、どの接頭辞を付けるかが決まる。その法則は以下のとおり。

- (1) me-: 語根のが l, m, n, ng, r, w, y で始まるとき
- (2) mem-: 語根が b, p で始まるとき。ただし、p は脱落する
- (3) men-: 語根が d, t, z で始まるとき。ただし、t は脱落する。

- (4) meng-: 語根が a, e, h, i, k, ky, o で始まる時。ただし、k は脱落する
 (5) meny-: 語根が s で始まる時。ただし、s は脱落する。
 (6) menge-: 例外的。cat, lap, pam などの単音節の語根に付ける。

マレー語の単語を辞書で調べるとき、派生形はそのまの形では載っていないので、その語根が何であるかを突き止めて、語根で辞書を引くことが必要となる。接辞がつくと、たとえば、menyakit という単語に出会ったとき、そのままでは辞書に載っていない。上記法則を用いて、このことばは sakit という語根に接頭語 meny- がついて動詞化したものであるということに気づくことが重要である。

同様に、語根の前に pe-, pem-, pen-, peng-, peny-, penge- を付け加えて、「何々する人」などの語を作る形 (peN-形) や、動詞、形容詞、名詞に接続して名詞を造る働きをもつ peN-an 形などについても説明が行なわれた。

そのあと、テキスト B を用いて、ジャウィ綴りの基本について説明があった。(黒田氏による注記: 「テキスト B はきわめて簡略化された薄い教材なので、初歩としてこれを選んだが、マレーシアでは、これが発行された 1988 年から以降、ジャウィ綴りについて新しいつづり方規則 “v” の音を表すための新しい文字が導入され、2002 年現在教えられてつつある綴りとは若干整合しない部分があるのできている。」)

2. アラビア文字表記マレー語の読み書き Baca Tulis Arab Melayu (2)

服部美奈(岐阜聖徳学園大学)

前回に引き続き、西スマトラの小学生用教科書を読み進めた。この教材で用いられているジャウィ表記法は、現代マレーシアで用いられているジャウィ表記法(テキスト A、B) とはいくつか異なる点がある。たとえば、現代マレーシアのジャウィ表記法では、母音を表記しない場合は、[a] か、曖昧音の [e] の場合だけとされるが、西スマトラの教材では、それ以外の母音でも表記されない場合がある。現代マレーシアのジャウィ表記法は、より標準化が進み、読み間違いが少ないように体系化されているのに対し、西スマトラのジャウィ表記法は、より、古い時代の文献に用いられているものに近いといえる。学習方法としては、両者を同時に学ぶと混乱しやすいので、まず、教材が豊富で、初心者にとってわかりやすい、現代マレーシアのジャウィ表記方法を習得し、その上で、それとの違いに注意を払いながら、他の地域や時代のジャウィ表記を学習していくはどうか、という提案がなされ、そのようなやり方を試みることとなった。

3. ジャウィ資料の応用 —サバ州における臨地調査の事例から: 「正しい」イスラームをめぐる村と国家: マレーシア・サバ州、海サマ人社会における公的イスラームの経験

長津一史(京都大学)

海サマ人はフィリピンとマレーシアの国境をまたぐ海域で生活している。かつてス

ルー王国の支配民族であったタウスグ人を頂点とする民族ヒエラルキーにおいて、海サマ人は最下層におかれていた。この関係において、海サマはアッラーに見捨てられた民であるという神話がタウスグ人などによって創られ、海サマ人に対する蔑視・差別がイスラームを用いたレトリックにより構図化されていた。この状況はフィリピン・スルー地域では現在も続いている。これに対し、マレーシア・サバ州では、そうした状況は独立後、徐々になくなっていった。現在ここでは、海サマ人はムスリムとして社会的に認知され、周縁的地位から脱却することに成功している。なぜ、このような差が生じたのか。報告者は、マレーシアのイスラーム行政・教育制度の地方への浸透という現象に注目し、それに対する海サマの能動的対応という視点からその理由を説明する。

マレーシア政府は、1970年以降、イスラームに積極的に関与するようになり、国家、州、郡の各レベルで、イスラームの行政、および、一般学校教育・宗教学校教育制度が整備されていった。それまでイスラームの行政・教育制度がほとんどなかったサバ州にも、半島部からこれらの制度が移植された。イスラーム制度化の影響は、村落レベルにまで及ぶようになった。この過程において調査地域であるサバ州東岸では、国家によって整備された制度に沿って伝達され、またその発信源とみなされたマレー性に結びついたイスラーム（公的イスラーム）こそが、「正しい」（＝公式の）イスラームであるとする観念が、流布するようになった。「正しい」イスラームは、フィリピン側のタウスグからではなく、半島部マレーシアからやってくる、とするイスラームの正統性観念の転換であった。

調査地のセンポルナ州センポルナ郡では、海サマ人はイスラーム行政機関によって形成された新たな公的イスラーム空間に積極的に参加していった。ここでは、神話にもとづき海サマ人をイスラームから排除するような差別は認められなかった。また、公式なイスラーム学校教育を受け、行政機関や宗教学校に務める海サマ人ウスタズも誕生している。かれらは、かつてのスルー起源の民族ヒエラルキーを認めるようなイスラームを地方的イスラーム（Ugama Tempatan）として否定し、「正しい」教えをもたらす公式イスラーム（Ugama Rasmi）を語るに足る知識とレトリックを身に付けている。

こうした社会的文脈において、海サマは自らのイスラーム化を積極的に推進した。海サマ人の公的イスラームの受容とイスラーム化は、スルー起源のヒエラルキーを転覆させ、自らの社会的位相を獲得しようするかれらの能動的な試みでもあったのである。

この研究に使用したジャウイ資料の例として、フィリピン側の海サマのイマームが使用していた宗教テキスト、Faidda Rukun Hangpu Tagtu（礼拝諸規則の13の効用）が紹介された。これはサマ語の文章をアラビア文字で表記したもので、サマ語の他に、アラビア語、マレー語、タウスグ語などの語彙が混在している。母音記号（シャクル）を付してあり、この点は、マラナオ語やマギンダナオ語、タウスグ語など、他の南部フィリピン諸語のアラビア文字表記と同様である。また、[ng]音を表記するために、アインの上に3つ点をふった文字が用いられており、これは、マレー語ジャウイ表記やマラナオ語ジャウイ表記と共通である。その他、1970年にマレーシアの国立モスク

が発した金曜日のフトバ（マレー語、ジャウィ表記）が紹介された。

質疑応答の要点は以下のとおり。

近世期には、サバ州の領域は、ブルネイやスルーという港市国家の後背地であった。したがって、歴史研究の立場から言えば、本報告で扱われたトピックは、本来港市国家の支配形態に起源する問題と考えられる。また、近世から現代に至るまでの歴史的展開という点に留意してみると、本報告は、近世の港市国家論、あるいは近代以降の海域東南アジア社会の変容といった論議の活性化にも寄与しうる重要な報告と思われる。（西尾寛治）

1950年代半ば以前、サバのムスリムは、(1)マラヤのマレー人ムスリムの威光を背負ったサバにおける地位向上、(2)マラヤのマレー人ムスリムが自分たちサバのムスリムを教え導くという態度への嫌悪、という相反する2つの考えを抱いていた。マラヤとの連邦形成はこの2つを同時に満たそうとしたものであった。この構造は独立後も基本的には変わっておらず、サバのムスリムがマラヤのマレー人ムスリムとのつながりを強調して地位向上をはかることと、マラヤのマレー人ムスリムの権威を実際に受け入れることは別のものとして捉えるべき。したがって、海サマ人がスルー王国のヒエラルキーから脱するためにイスラム化を利用したという論旨には同意するが、それをマラヤの権威の受け入れと結び付ける議論には疑問。また、1990年代以降もこの構造は基本的には変わっていないだろう（山本博之）。 <川島緑>

第3回研究会

日時：2001年6月16日（土）13:00-18:30

場所：上智大学四ツ谷キャンパス7号館11階第2会議室 出席者：17名

1. アラビア文字とその伝播

東長靖（京都大学）

まず、アラビア文字の基本について説明が行われた。アラビア文字の特徴として、子音のみを標記すること、そのため母音の表記方法に工夫があること、大文字・小文字の区別がないことなどが指摘された。その他、アルファベットの現在の並べ方やその起源、文字の書き方、書道の書体のバリエーションについての説明もなされた。

次に、アラビア文字の起源、および、アラビア文字がアラビア語以外の言語を表記する手段としてアフリカや西アジア、南アジア、中央アジア、東南アジア、東アジアなどに伝播していったこと、そして、その際、それぞれの言語を表記するために様々な工夫が加えられていったことが論じられた。アラビア文字、ギリシア文字、いわゆるローマ字など、世界各地で用いられているアルファベット文字体系は、フェニキア文字という共通の起源を持つ。フェニキア文字とは、22の子音字からなるフェニキア人が用いた表音文字であり、それがアラビア語を表記するために発達したのがアラビア文字、ラテン語を表記するために発達したのがローマ字である。フェニキア語の子音を示す表音文字を用いて異なる言語を表記しようとする場合、母音と当該言語固

有の子音をいかに表現するかという問題が生じる。この問題に対し、諸言語では(1)一部の文字に改良を加えるなどして新たな子音文字を付け加える、(2)一部の子音文字に母音文字としての機能を持たせる、(3)母音文字を創出する、などの工夫がなされてきた。

たとえば 27 文字からなるギリシア文字のアルファベットは、母音やギリシア語固有の子音を表記するためにフェニキア文字に工夫を加え、新たに創出した 5 つの文字を補足したものである。エトルリア文字はそれにさらに、エトルリア語表記に適した工夫を加えたものであり、ラテン文字は同様に、エトルリア文字をラテン語に適するように工夫を加えたものである。現在、我々が用いている英語のアルファベットは 26 文字から成るが、これは古典期ラテン語の文字に、英語表記に適した工夫を加えて完成したものである。

現在アラビア文字で表記されている言語としては、ペルシア語、クルド語、ウルドゥー語、シンディー語、カシミール語、ウイグル語、ベルベル語などがある。トルコ語、ウォロフ語、ハウサ語（アジャミー）、フルフルデ語、カヌリ語、スワヒリ語、マレー語もかつてはアラビア文字で表記されていた。また、中国語の音をそのままアラビア文字で表記するというも行われている。これらの多くは、アラビア語の属するアフロ・アジア語族（セム語族）とは違う言語体系に属しており、それらをアラビア文字を用いて表記するために、各言語では特別な工夫がなされてきた。報告では、その代表的な例としてペルシア語、オスマン・トルコ語、ウイグル語がとりあげられ、それぞれについて(1)アラビア語にない子音を表記するための工夫、(2)当該言語にない音でも借用原語にあるために残っている文字、(3)アラビア語と比べた際の留意点、(4)母音表記の工夫、が紹介された。

上記各言語の表記方法の特徴は以下のとおりである。

A. ペルシア語：母音の数がアラビア語と同じであるため、母音表記における新しい工夫はみられない。固有の子音 (p, ch, zh, g) を表わすために、アラビア文字の類似の音を表わす文字の上下に点やダッシュを足して、新たに 4 文字を創出している。

B. オスマン・トルコ語：8 個も短母音があるにもかかわらず、それを表記する新しい工夫をせず、伝統的アラビア文字表記方法に従っている。そのため、4 つの母音がすべてワーウで、3 つの母音がすべてヤーで示されることになり、読みこなすにはアラビア語・ペルシア語の知識とかなりの経験が必要となる。子音についてはアラビア語の 28 文字にペルシア語の 3 文字 (p, ch, zh) を加えたものを用いている。ペルシア語にない固有の子音もあるがアラビア文字で代用しており、新しい文字創出の工夫はなされていない。

C. ウイグル語：トルコ語と異なり、母音、子音ともに、音と文字が一対一対応する正書法を確立した。短母音はトルコ語と同じく 8 個あるが、アラビア文字に修正を施して新しい文字を創出したので、それぞれが別の文字として表記される。子音については、アラビア語の 28 文字の内、ウイグル語にない子音を示す 8 文字は削除され、ペルシア語の 4 文字と、ウイグル語固有の子音を示す文字 1 個が創出された。一貫性のある表記方法であり、例外がなくわかりやすい。反面、アラビア語やペルシア語からの借用語についても原語の綴りと無関係にウイグル語正書法にもとづいて表記するため、

イスラームやムハンマドといった基本的なイスラーム用語も含めて、原語からかけ離れた表記になる。

アラビア文字を用いた非アフロ・アジア語族系諸言語の表記体系の差異をごく単純化して述べると、一方の極には伝統を重視するために文字体系としては無理のあるオスマン・トルコ語の表記方法があり、もう一方の極には、明快さを追求して伝統を破壊したウイグル語の表記方法があるといえる。マレー語ジャウィ表記方法は、この両者の中間くらいに位置している。母音は短母音 6 個 (a, e, 弱い e, i, o, u) と二重母音 2 個 (ai, au) を合わせて 8 つあり、アリフ、ヤー、ワーウで表記する (ただし、これらの半母音文字を表記しない場合がある)。子音はアラビア語の 28 文字、アラビア語に存在するが普通はアルファベットに数えられないラーム・アリフ、ハムザの 2 文字、ペルシア語からの借用文字 1 個 (c)、ペルシア語からの借用文字の変形 1 個 (g)、マレー語固有の子音を表わすためにアラビア文字に工夫を加えて新たに創出した文字 2 個 (ny, ng)、合計 34 個である。

アラビア文字が、母音を表さず、イスラーム世界の諸言語を表すのに必ずしも適していないという不便さにもかかわらず、使われ続けた (あるいは現在でも使われ続けている) のには、イスラームが大きな原因となっていると考えられる。キリスト教の場合には、元来の聖書の言語であるヘブライ語やアラム語でなく、ギリシア語やラテン語への翻訳をした後で (あるいは翻訳をしたことによって)、キリスト教が各地に広まったという事情がある。

これに対して、イスラームの場合は、アラビア語のクルアーンが確立してしまっただけから、他言語文化圏に広がったものであり、クルアーンやアラビア語の聖性を無視することができなかつたものと考えられる。キリスト教におけるギリシア語・ラテン語も宗教的な重要性をもってきたが、イスラームにおいてアラビア語が「神のことば」そのものと信じられることを考えれば、アラビア語そのものの持つ聖性は、キリスト教の場合とは次元を異にする。その意味では、近代に入ってから、トルコ、マレーシア・インドネシアなどのローマ字採用や、ウイグル語によるアラビア語の原綴無視は大きな変化と言えよう。他方、旧ソ連崩壊以後の中央アジアなどでアラビア文字への回帰が一部で見られたことも、このような問題の一環として考えることが可能と思われる。〈川島緑+東長靖〉

本報告は、アラビア文字表記の起源と伝播を、時間的には古代から現代まで、空間的にはアフリカから東南アジアまでの大きなスケールでとらえ、その中にマレー語ジャウィ表記を位置付ける斬新な試みである。東南アジア研究者は、ジャウィ文書に関して、時間的には 13 世紀末の「東南アジアのイスラーム化」以後、植民地行政が導入した現地語ローマ字表記の普及以前の時期に、また、空間的には島嶼部に限定してその重要性を認識する傾向が強い。だが、ジャウィ表記を通じて東南アジアにもたらされたり、それによって東南アジアの人々が発信したことばや概念、思想をより深く理解するためには、より大きな時間、空間において展開された人間の諸活動を視野に入れる必要があることを痛感した。アラビア文字の伝播以前にインド系文字表記が使用さ

れていた東南アジアで、アラビア文字の伝播、受容、既存の文字表記体系との関係がどのように展開されたかは、興味深い問題である。また、各言語がアラビア文字表記に加えた工夫について報告者が指摘した4つのポイントは、マレー語ジャウィ表記の時期的変化や、ブギス語、ジャワ語、タウスグ語、マラナオ語など、他の現地語のアラビア文字表記(広義のジャウィ)を比較検討する際に有益な枠組みを提供している。
 <川島緑>

2. ジャウィ綴りの書き方と読み方：母音を中心に 山本博之（東京大学）

本研究では、ジャウィ綴りの基礎を学ぶための教材として、Abdul Razak Abdul Hamid & Mokhtar Mohd. Dom. Belajar Tulisan Jawi (Learn Jawi). Petaling Jaya: Penerbit Fajar Bakti. (教材A)を用いている。この教材は、現代マレーシア語のジャウィ綴りをマレーシア語と英語の両方で解説したもので、練習問題も豊富にあり、独習書としてすぐれている。報告者は、この教材の中からジャウィの読み書きにとって最低限必要な知識を厳選して「ダイジェスト版」手引書を作成し、それに基づいてジャウィ綴りの要点を説明し、若干の練習を通じてその知識を確認した。「ダイジェスト版」が扱う項目は以下のとおりである。

アラビア文字の形、母音 alif(子音には含まれた a, 「弱い e」, 語尾の a)、母音 ya と wau (母音+i/e/y, CVC の i/e, u/o/w)、接辞と慣用的な表記(接頭辞、接尾辞、慣用綴り、その他)。

教材Aを端から端まですべて独習するには、かなり多くの時間がかかるので、その内容にメリハリをつけてコンパクトにまとめたダイジェスト版とそれにもとづく解説は、なかなか十分な独習時間を取れない参加者にとって大変ありがたい。報告者の労を多とする。<川島緑>

3. Jawi を読み書きするためのマレー語の基本 (3) 黒田景子（鹿児島大学）

4. アラビア文字表記マレー語の読み書き Baca Tulis Arab Melayu (3) 服部美奈(岐阜聖徳学園大学)

前回、前々会に引き続き、それぞれの教材に基づいて説明が行われた。<川島緑>

番外編研究会

日時：2001年7月20日(金) 18:30-20:30

場所：上智大学四ツ谷キャンパス10号館323号室 出席者：約10名

ジャウィ綴りの書き方と読み方：半母音と接辞(教材A) 山本博之(東京大学)

報告者が作成した教材Aの「ダイジェスト版」を用いて、前回の研究会に引き続き、

練習を交えながら、ジャウイ綴りの基礎についての説明を行った。今回で綴りの基礎は一応習得したものとし、次回からは実際にジャウイ文書の講読を行う。〈川島緑〉

第4回研究会

日時：2001年10月20日（土）11:00-18:00 頃

場所：上智大学四ツ谷キャンパス 7号館12階第4会議室 出席者：14名

1. ジャウイの発展：綴りの変遷 西尾寛治（東京女子大学）

西尾氏は、ジャウイの綴りの変遷に関する先行研究を挙げた後、Kang Kyong Seock の“Perkembangan Tulisan Jawi dalam Masyarakat Melayu”および Amat Juhari Moain の“Perancangan Bahasa : Sejarah Aksara Jawi”によってジャウイの歴史の時代区分を示した。すなわち、14世紀から16世紀（アラビア語式の表記法の影響が強い時期）、17世紀から19世紀（表記の安定の時期）、20世紀（標準化の時期）に区分し、後の時代になるほど母音を明示する傾向にあると指摘した。

続いて、14世紀から16世紀のジャウイ文献と表記の特徴が検討された。現存する最初のジャウイ表記である、1303年のトレンガヌ碑文（マレー半島東海岸のトレンガヌで発見）では、この段階で既に、アラビア文字にはないマレー語の音韻、ca、nga、pa、ga、nya を表記するために、ジームやガイン、ヌーンの点を三つにしたりカーフに点を一つ加えたりした、ジャウイ独自の文字が使われているという。次に、紙に記されたものとしては最古の、テルナテのスルタン・アブー・ハヤットの書簡（1521、1522年）では、gaの表記にカーフ（k）の下に点を打つなど、現代行われている表記と異なっている。

本の形で残るものとして最古の「アカイド・アル・ナサフィ」（1590年）では、gaには点を記さないことが多く、記す場合も下に打つ、アラビア語のシャッダ記号を用いる、などの点で現代の表記法と異なる。

ジャウイ表記の統一化に貢献したのは、1511年のポルトガルのマラッカ占領により、マレー系住民が各地に避難し、ディアスポラが起こったこと、17世紀にアチェにおいて大量のイスラム文献がマレー語に訳出されたことが要因として挙げられる。また、マレー語のローマ字表記は、すでに16世紀に宣教師がマレー語で布教するために行われていたことが触れられた。〈石澤武〉

2. ジャウイ綴りの要点のレビュー

山本博之（東京大学）

これまで教材A, B, Cを併用してジャウイ綴りの学習を行ってきたが、マレーシアにおける現代マレーシア語ジャウイ表記の標準的法則にもとづく教材A, Bと、インドネシア（西スマトラ）で一般的な綴り方を示した教材Cの間には、同じジャウイ綴りといっても、かなり違いがあることが明らかになった。本研究会参加者のジャウイに対する関心は、ジャウイ資料を読んで研究に用いることにあるので、そこに焦点を絞り、

読み方を中心にした学習方法を確立する必要がある。本報告は、このような研究上の必要性に応えるべく、教材 A, B、および、教材 C によるジャウィ綴りの読み方の法則を分析し、比較検討したものである。3つの教材のエッセンスを凝縮した密度の高い報告であったが、報告時間が限られていたため、参加者がやや消化不良であったのが残念である。〈川島緑〉

3. 資料紹介

黒田景子氏より、マレーシアで発行されたジャウィの出版物が紹介された。特に、カセット付きの幼児向けジャウィ絵本や、ジャウィとローマ字の二つでマレー語が表記され英単語も添えられている子供用のイラスト事典が注目された。また、政府系出版社のデワン・バハサ・ダン・プスタカからは、ジャウィについての学術書をはじめ、ジャウィの絵本、ジャウィ表記の小説、ジャウィの正書法が発行され、政府の政策としてジャウィの普及が図られている事がうかがえた。

討論では、ジャウィの本はクアラルンプールでは北部諸州ほど出回っていない、東マレーシアではジャウィの教育は普及していない、などの指摘があった。〈石澤武〉

4. ジャウィ文書講読

マレーシアの小学生用ジャウィ教科書 *Rahsy Belajar Jawi* (ジャウィ学習の秘訣) の第1回目の講読を行った。参加者が順番に、ローマ字への翻字と和訳をし、検討した。p. 3 のわずか数行の講読を終えただけであるが、これまでに学んだ法則を用いながら、実際にジャウィ文書を読む作業は、大変楽しいものであった。文章や内容は単純であるが、講読の過程で、インドネシア語とマレーシア語の語彙の微妙な差を知ることができるなど、副産物もあり、大変有益であった。〈川島緑〉

5. 資料所在調査報告

水上浩氏 (東京外国語大学大学院) より、東京外国語大学府中キャンパス図書館所蔵のジャウィ文書7点が請求番号付で紹介された。内訳は、マレーシアの出版物が5点で、子供向けの読み物または教科書である。他の2点はインドネシアで出版された *Sejarah Melayu* であった。〈石澤武〉

第5回研究会

日時：2001年11月24日(土) 11:00-18:00 頃

場所：上智大学四ツ谷キャンパス 7号館11階第2会議室 出席者：15名

1. 『Qalam』誌に見るシンガポールのムスリム同胞団の初期の活動について

山本博之 (東京大学)

山本氏は1950年からシンガポールで(マレーシア独立後はクアラルンプールで1960

年代末まで) 発行された月刊誌『Qalam』の内容、およびこの雑誌から明らかになったシンガポールにおけるムスリム同胞団の活動を紹介した。さらにこの『Qalam』研究の持つ意義と広がりをも明らかにした。

『Qalam』はバンジャルマシン出身で、カイロのアズハル大学に学んだアフマド・ルトフィによって発行された。アフマド・ルトフィは1920年代後半にエジプト留学生によって発行された『アズハルの号呼(Seruan Azhar)』や『東方の選択(Pilehan Timoer)』にも関わり、『Qalam』も留学生の寄稿があるなどカイロやメッカとの繋がりを常に持っていた。あえてジャウイ(アラビア語表記)で書かれたのが何よりの証拠であるように、汎イスラム性が強調された。

シンガポールからマラヤ在住のマレー人向けに発行された『Qalam』の内容にはさらにいくつかの特徴がある。まず第一に、ナショナリズムとの関連から、インドネシアについての記述が非常に多いことである。第二に、西洋近代に取り残される怖れを抱き、科学技術を重視すること、第三に共産主義思想の浸透を警戒していることである。インドネシアについてはスカルノ大統領に関する記述が多い。スカルノ個人の人気に加え、マラヤのナショナリズムを喚起するためであったと思われる。しかし、スカルノがイスラーム政党であるマシュミ党と対立し、共産党と接近するにつれてスカルノに対して批判的な立場をとるようになる。

前述のように中東との繋がりは『Qalam』の特徴であり、1956年6月には誌上でムスリム同胞団の結成を表明、読者に会員を募っている。56年6月号から11月号まで毎号100名程度の会員登録者が記載されている。会員名簿によれば、マレー半島はシンガポールから国境を越えてタイ南部まで、さらにボルネオ島の登録者もいる。

『Qalam』による「祖国(Tanahair)」とはまずシンガポールを含むマラヤであり、マラヤから北と東に広がった。他方で、インドネシア政府に禁止されたためか、『Qalam』はインドネシアには配布されていない。

山本氏は最後に、『Qalam』に表れている汎イスラム主義が北ボルネオ(サバ)におけるマレーシア連邦構想の論理に影響を与えたという分析を示した。すなわち、サバにはスルタンがいないため、イスラムの権威を持つマラヤのスルタンの監督下に入ることで、サバの自治の正当性を得ることが可能になるというのである。

コメンテーターの飯塚正人氏(東京外国語大学)は、他国の例を引きながらエジプトのムスリム同胞団との関係について質問した。またムスリム同胞団などによるイスラーム主義は近代性を否定せず、『Qalam』の科学技術志向は、これと矛盾しないことを指摘した。フロアーからはシンガポールのムスリム同胞団におけるアラブ人の関わりや、マレーシア連邦の論理形成におけるブルネイへの影響などについて質問がよせられ、活発な議論が交わされた。〈見市建〉

2. ジャウイ文書講読

講読テキスト Rahsia Belajar Jawi. (ジャウイ学習の秘訣) p.3 の途中から p.10 の終わりまで講読を行った。〈川島緑〉

第 6 回研究会

日時：2001 年 12 月 23 日（日）11:00-19:00

場所：上智大学四ツ谷キャンパス 7 号館 1 第 5 会議室 出席者：約 15 名

1. ジャワのペゴン史料利用紹介 – アフマッド・リファイ (Ahmad Rifa' i) の著書を具体例として – 菅原由美 (東京外国語大学大学院)

前半では、ジャワにおけるペゴン(pegon:アラビア文字を用いたジャワ語表記)利用の歴史について報告があった。ジャワでは、9 世紀にグラント文字を基にして作られたジャワ文字が登場し、主に宮廷文学で多用されていた。16 世紀に入ると、イスラームの浸透によりアラビア文字が使用され始めるが、当初、ジャワ文字使用の伝統と記録媒体が紙ではなくロンタールであったことにより、イスラーム文書にもジャワ文字が使用された。しかし、次第にイスラーム文書についてはペゴン、宮廷文学についてはジャワ文字という使い分けがなされるようになった。さらに、19 世紀から 20 世紀にかけ、メッカ巡礼者やプサントレン (イスラーム寄宿塾) が増加し、ペゴンで書かれた宗教書はムスリム中流層に属する地方印刷業者によって石版印刷されたものの、狭い範囲でのみ流通した。この時期は同時にスラカルタ王宮文芸復興によってジャワ文字の利用が拡大した時期でもあった。20 世紀に入ると、イスラーム改革運動によって再びアラビア文字が注目されたもののその使用は一部にとどまり、ローマ字使用が日常化した。

ペゴンは、母音符号を全適用しているのが特徴で、またアラビア文字では表記できないジャワ語の音の表記に対しては点の打ち方を工夫して新しい文字 (子音) が加えられた。主としてペゴンは、アラビア語文献のジャワ語の全翻訳、行間の逐語訳、解説などに使用された。

後半では、1786 年に中部ジャワ・スマラン州に生まれた 19 世紀の代表的ウラマーであるアフマッド・リファイの著書にみるペゴンの利用について報告があった。彼は 1837 年以降、ペゴンを用いた宗教書の執筆を始め、生涯にわたって執筆した著作は現在確認されているだけで 65 冊にのぼる。彼は、植民地政府に仕える現地人官吏や宗教役人はカーフィルであり、民衆は彼らにではなく「正しいウラマー」に従い、イスラームの正しい知識を獲得する義務を主張した。彼の著書は植民地政府現地人官吏や宗教役人を侮辱しているとして、リファイは 1859 年にアンボン島に追放され、同地で死亡した。しかし、その後も弟子達の中・西部ジャワで秘密裏に活動を続け、リファイの著書を教科書とする彼らの教育活動は現在も続けられている。

リファイの著書にみるペゴンには、リファイ特有の使用方法がみられる。1848 年執筆の『アブヤナル・ハワイジ (Abyanal Hawaij)』(III pp. 11-12, 17-18) では、点の打ち方や母音符号のつけ方などに特徴がみられた。

本報告は、ペゴンの使用に関する歴史的展開、および 19 世紀におけるペゴンの具体例など、東南アジア各地域に広がるアラビア文字の使用に関する興味深い事例を提供しており、研究会においても活発な議論がなされた。〈服部美奈〉

2. 資料情報交換・研究活動の打ち合わせ

参加者がジャウイ資料に関する文献を紹介した。1月の研究会、および、サムエル・タン氏招聘計画について議論を行った。〈川島緑〉

3. ジャウイ文書講読：Rahsia Belajar Jawi. (ジャウイ学習の秘訣)

第6課 p. 11の初めから、第8課の終わり p. 20まで講読を行った。今回はこのテキストの講読を終了し、さらに、新しいテキスト、Al Munirの購読を開始する予定である。Al Munirは、1910年代に西スマトラで発行され、インドネシア語で書かれたイスラーム近代派の雑誌である。〈川島緑〉

第7回研究会

日時：2002年1月20日（日）11:00-18:00 頃頃

場所：上智大学四ツ谷キャンパス9号館3階359号室 出席者：16名

1. 20世紀前半の東南アジアにおけるアラビア語新聞・雑誌

新井和広（ミシガン大学大学院）

第7回研究会は、新井和広氏の発表「20世紀前半の東南アジアにおけるアラビア語新聞・雑誌」を受けて始まった。

まず、東南アジアのアラブ系移民のうち約90%の出身地であるハドラマウトの状況が述べられ、同地が乾燥した貧しい土地で、歴史的に移民を多く出していたことが説かれた。荒涼たる同地の風景の写真をみると、確かに移民に出るのも納得できる。加えて、18世紀以後部族間の抗争が激化しさらに移民が進んだが、彼らの最大の移住先は東南アジアであった。当時のハドラマウトの経済をまかなっていたのは、移民からの送金だった。

第2に、東南アジアのアラブコミュニティの状況が論じられた。東南アジアの中でも特にジャワが主な移住先で、これは、19世紀にオランダ領東インドが個人事業に市場を開放したことによる。彼らは男性単身のムスリムであったため、移住先のイスラム社会に容易に同化できた。

20世紀初頭、華人コミュニティの会館の活動に触発され、「ハドラマミーの覚醒」（アル・ナフダ・アル・ハドラマミーヤ）運動が勃興し、アラブ人コミュニティの近代化を目的として、近代的な学校の設立や出版活動を行った。また、当時、ハドラマウトの社会階層である sayyid（ムハンマドの子孫とされる）の社会的地位を巡る論争が移住先のアラブコミュニティ内部で起きており、sayyid 中心の Jamiyya Khayr という団体と mashaikh（シャイフ）中心の Jamiyya Al-Islah wa Al-Irshad Al-Arabiyya という団体の間に対立が見られた。

第3に、アラブ・コミュニティが発行した新聞・雑誌全50タイトル（未発見のものがまだ存在する可能性あり）が詳細なリスト付で示され、その類型と内容について論

じられた。これらは殆どが個人による出版で、1年程度で廃刊になるものが多かったという。

前述の sayyid 中心の団体と mashaikh(シャイフ) 中心の団体との対立を反映して、どちらに組するかでまず分類可能であり、その他にマレー語で出版する、インドネシアを祖国と見なす団体の新聞もあった。さらに、各地のニュースを伝える一般誌、イスラーム一般を扱う宗教関係の新聞・雑誌などが存在した。内容面では、上述の団体を含めた各々のアラブ団体の思想の広布、ハド라마ウトの状況、ハド라마ウトの歴史や詩などの紹介、世界情勢やアラブ各国の状況（パレスチナ問題など）の報告などが挙げられる。

最後に、彼らアラブ移民コミュニティの状況を映し出すものとして、これらアラブ新聞・雑誌の重要性が強調された。また、本発表では、イギリス・オランダなど植民地当局の対応についても取りこぼすことなく論じられた。

質疑応答では、1942年の日本軍のオランダ領東インド占領により、ハド라마ウトへの送金がストップしたため、同地の経済は壊滅し飢饉も発生したことが言及されたが、これは印象に残った。現在のハド라마ウト移民は、1950年代からは湾岸諸国に流入し、東南アジアへ向かうことは少ないという。しかし、現在もなおインドネシア国内のアラブ・コミュニティの結びつきは強固であり、主に繊維製品などの中間貿易を生業としつつ、その独自性を保っているということである。〈石澤武〉

2. 資料紹介

(1) ジャウイ文献関連カタログの紹介 西尾寛治（東京女子大学）

午後は、西尾寛治氏より、ジャウイ文献関連のカタログの紹介が行われた。マラヤ大学図書館から刊行されたものが4点、マレーシア国立図書館から刊行されたものが11点、その他、オックスフォード大学出版からのものが2点、ライデン大学ライブラリーからのものが2点であった。〈石澤武〉

(2) 他の資料紹介・情報交換（参加者）

また、2001年12月12日から31日まで、第2班の海外出張でインドネシア・マレーシアを視察した石澤武（「イスラーム地域研究」第2班事務局）より、マレーシアの街頭で見つけたジャウイ表記の看板（第2班ホームページに報告あり）、及び収集した資料について紹介があった。〈石澤武〉

3. ジャウイ文書講読

第4回から読み始めた *Rahsia Belajar Jawi* (Penerbitan Pustaka Antara, 1989) を講読し、ついに今回で読了した。既に午後6時を回っていたが、引き続き、1910年代に西スマトラのパダンで発行されたイスラーム近代派の雑誌“*Al Munir*”誌を新たなテキストとして、講読に取り掛かった。

開始にあたって、服部美奈氏から、同誌についての説明を受けた。この雑誌の指導

者スタン・ジャマルディン・アブ・バカルは、19 世紀終わりにメッカで学び、20 世紀初頭にオランダ領東インドに戻ったが、ラシード・リダーの「マナール」誌を購読していたという。当時は、東南アジアにも「マナール」が流入しており、東南アジアについての記事もしばしば「マナール」に掲載された。“Al Munir”のオリジナルはジャカルタのプルプスタカアン・ナショナルに所蔵されているということである。

今回は第 1 回目ということで読んだ分量はわずか 4 行だったが、次回からは本格的な講読を開始する見込みである。<石澤武>

第 8 回研究会

日時：2002 年 2 月 23 日（土）12:00-17:30

場所：上智大学四ツ谷キャンパス 3 号館 537 号室 出席者：12 名

フィリピン大学総合発展研究センター・ミンダナオ研究プログラムを率いるサムエル・タン氏を迎えて、研究会を行った。タン氏はフィリピン史、南部フィリピンの歴史や文化、フィリピン・ムスリム政治運動史などに関する数々の著作を有する歴史学者で、スールー諸島やミンダナオ島のタウスグ語、サマル語、ヤカン語、マギンダナオ語などのジャウィ文書の収集、翻字、研究への利用を行っている。また、広島大学のオマール・ファルーク氏は、カンボジアのイスラームとジャウィについて報告を行った。当初の予定では、服部美奈、川島緑の各氏も資料紹介・報告を行う予定であったが、短期間しか日本に滞在しないタン氏の報告と質疑応答により多くの時間をとることとし、両名の報告は 4 月以降の研究会に延期することとした。以下は、それぞれ、オマール氏、タン氏の作成した報告要旨である。<川島緑>

1. The Place of Jawi in the Reconstruction of Islam in Cambodia.

Omar Farouk Bajunid (Hiroshima City University)

The role of Islam in modern Cambodia seems to be characterized by the paradox of its peripheral treatment in academic works and assumed numerical, cultural, religious and political marginality on the one hand and its actual centrality in the lives of the Muslims in Cambodia, on the other hand. A casual bibliographic survey of recent works on Cambodia will reveal the incredible lack of recognition given to the Muslims as a national minority in Cambodia. With an estimated population of more than half a million people, their historical, cultural, religious and even political significance in the kingdom certainly could not be underestimated.

This paper attempts to examine one aspect of the emerging profile of the Muslims in Cambodia with a view to evaluating the dynamics of their identity as a religious minority. Specifically, the paper looks at the place of Jawi in the Reconstruction

of Islam in Cambodia. Although it is acknowledged that the term 'Jawi' may have a variety of meanings, it is argued that no matter how it is used, it does have a basic Islamic connotation. Jawi, therefore is inherently Islamic. In this particular paper, the term Jawi is basically used to refer to the Arabic script of writing. The main thesis of this paper is that the reconstruction of Islam in Cambodia has brought with it the resurgence of Jawi among its Muslim population.

The Muslims had been severely displaced by the civil war that broke out in Cambodia since the 1970s. It was only in the post-UNTAC [United Nations Transitional Authority in Cambodia] era of the early 1990s which was able to restore peace in the kingdom that the role of the Muslims was rehabilitated.

The rehabilitation of the Muslims was quickly accompanied by the reconstruction of mosques all over the kingdom. Inspired by the support of individual philanthropists, Muslim NGOs and foreign Muslim governments the religious life of the Muslim community in Cambodia was restored. Within this framework, Quranic education and Islamic schools were revived and a new generation of Islamic teachers was created. Islamic activities including tabligh and dakwah were pursued with a great deal of enthusiasm. Royal and official patronage of Islam in Cambodia also facilitated its reorganization.

The above development brought about a general resurgence of Islam in Cambodia. The revival and spread of Jawi occurred within this scenario. The distribution of the Quran and other religious literature throughout the network of Muslim mosques and schools throughout Cambodia created the necessary conditions conducive to the reintroduction and growth of Jawi. With the concerted promotion of Quranic education, Jawi literacy in Cambodia has been restored. But it is not just Arabic that is being taught among the Cambodian Muslims because Jawi is also used to write both the Malay as well as the Cham languages.

Although the relevance of Jawi has been reestablished and its use expanded among the Muslims in Cambodia, there is a parallel if not competitive development of Khmer among the Muslims. The phenomenon of the Islamization of Khmer has already taken place among the Muslims as Khmer is now increasingly used as a new Islamic language of instruction. For example, Friday sermons [khutbahs] have already been conducted in Khmer. The Khmerization of Islam seems to be an inevitable process in Cambodia. Islam will surely acquire distinctive Khmer traits which are compatible to it.

Nevertheless, it is almost certain that it is Jawi that will remain as the

irreducible common marker of Islamic identity in Cambodia.

(By Omar Farouk Bajunid)

2. The Jawi Tradition in the Philippines: Its Origin, Development, and Prospects: A Preliminary Inquiry.

Samuel Tan (University of the Philippines)

There is no doubt that the study of the Jawi tradition in the Philippines is of fundamental importance to the understanding and resolution of the armed conflict in Southern Philippines principally involving the Bangsamoro struggle for freedom against the government.

Being the only existing ancient evidence of the Filipino Muslim written intellectual tradition that began from the advent of Islam about 1280 A. D. and steadily but traumatically developed through over four centuries of colonial conquest and pacification, the Jawi tradition deserves more than ordinary and casual attention from the Philippine government and the academic community.

Because of its similarity to similar written traditions in Southeast Asia and, even, beyond where Muslim communities are found, the Jawi tradition becomes logically a valid focus of international scholarship and inquiry especially from those involved in Islamic studies.

Several facts about the Philippine Jawi tradition merit particular attention. First is the use of the Arabic script to preserve in Tausug, Maguindanao, Sama, Yakan, Kalibugan, Maranao, Iranun, Kalagan, and other Muslim groups the origin, development, and prospects of Islam in the various local-ethnic communities. In effect, the Jawi allowed the preservation of a folk Islamic tradition which demonstrated the dynamic and natural blending of fundamental Islamic elements and indigeneous cultures. Consequently, the preservation and survival of Islam through the years has been due to its syncretic adaptation to local cultures.

The second fact is the employment of Jawi as a vehicle of protest and resistance against colonialism by the upper as well as the lower classes of Muslim society as shown by the variety of Jawi materials collected from national and foreign archives and from fieldwork. Conveniently, these materials may be divided into (1) the historical Jawi consisting of the Kasultanan, Kadatuan, Kahadjian, Kabanuwahan, and Kaginisan materials and (2) the contemporary Jawi consisting

of several Kitabs which are interpretations and comentaries on various teachings of Islam derived from either the Kmoran or the Hadith.

Lastly, the Jawi tradition provides the essential basis for integrating and promoting common heritage ties of Southeast Asia and the Darul Islam not necessarily along the rigid lines of Islamism but rather, around the variety of syncretic patterns of growth of Islamic cultures in countries where Muslim communities exist. (By Samuel Tan)

このニューズレターはジャウイ文書研究会の記録、および、ジャウイ文書研究に役立つ情報提供を目的としており、研究会出席者に会場で配布しています。研究会に出席できない方でこのニューズレターの入手を希望される方は、あて先を記入し 190 円分の切手を張った A-4 サイズ返信用封筒を事務局にお送りいただければ、郵送いたします。なお、研究工具や資料、文献の紹介、研究報告など、投稿を希望される方は、事務局にご連絡ください。

ジャウイ文書研究会ニューズレター 第 1 号

(2 版 : 2002 年 4 月 24 日印刷)

2002 年 4 月 20 日発行

上智大学アジア文化研究所 川島緑研究室

発行者 : ジャウイ文書研究会事務局

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町 7-1

電話:03-3238-3697 Fax: 03-3238-3690

e-mail: midori-k@sophia.ac.jp